

朝霞キャンパスの軌跡

2021年春、ライフデザイン学部と ライフデザイン学研究科は赤羽台キャンパスへ

本学では「地球社会の明るい未来を拓く」を目標に中期計画「TOYO GRAND DESIGN 2020-2024」を掲げ、キャンパスの整備や学部学科の再編などを進めています。
その一環として、2021年4月に朝霞キャンパスで学ぶライフデザイン学部とライフデザイン学研究科が赤羽台キャンパスへ移転します。

朝霞キャンパス、学びのあゆみ

1977年に開設した朝霞キャンパスは、埼玉県朝霞市の黒目川沿いにある落ち着いた雰囲気が特徴です。2005年3月まで文・経済・経営・法・社会学部の1・2年生が学び、同年4月からは、新設されたライフデザイン学部のキャンパスとしてリニューアル。ライフデザインの学びに適した施設や地域と連携した多くの実践的な学修により、幅広い専門知識をもった人材を輩出してきました。



1977年

文系5学部の1・2学年用のキャンパスとして開設



2005年

ライフデザイン学部生活支援学科・健康スポーツ学科を設置



2014年

新体育館竣工、テニスコート移設



2015年

ライフデザイン学部開設10周年として、シンポジウムやイベント、コンテストなどを開催
朝霞市と連携協力に関する包括協定を締結

2018年

ライフデザイン学研究科生活支援学専攻・健康スポーツ学専攻・ヒューマンライフ学専攻・人間環境デザイン専攻を設置

2021年4月

ライフデザイン学部とライフデザイン学研究科が赤羽台キャンパスへ移転



朝霞キャンパスを彩った活動と思い出の施設



地域の子育てを支える
「子育てサプリー・子育てひろば」

子ども支援学専攻の学生と教員が中心となり、他学科他専攻の学生や教員も参加して、キャンパス内の保育実習室等を開放。0歳～就学前の子どもとその保護者を対象に、親子で楽しめるプログラムや保護者がリフレッシュできる講座を提供しました。参加者が子育て仲間をつくれる充実した場となっただけでなく、学生も子どもや保護者の日常を知ることができる貴重な機会となりました。



シニアの健康づくりに取り組む
「Keep Active」

2009年にスタートした「Keep Active」では、朝霞市内のシニア世代を対象に、健康的な身体づくりに取り組む場を提供してきました。保健体育の教員や健康スポーツに関する職業を目指す学生が企画・運営を担当。また、2014年開始の「健康スポーツ倶楽部ASAKA」では、小学生を対象にさまざまなスポーツ・運動体験プログラムを提供しました。養護教諭を目指す学生が、子どもの健康管理と安全管理にあたってきました。



小学生の好奇心を刺激する
「子ども大学あさか」

子どもの知的好奇心を刺激する学びの機会と、地域で子どもを育てる仕組みづくりを目指した「子ども大学あさか」を開校。小学4～6年生を対象に、大学教員やさまざまな分野の専門家による「はてな学」「ふるさと学」「生き方学」という3つのテーマで講義や実習体験を企画。2011年にはじまり、「埼玉・教育ふれあい賞」を2度受賞するなど地域に根づいた活動が高く評価されました。



実践的にデザインを学ぶ
「実験工房棟」

実験工房棟は、もともと研究室として使用していた空間をライフデザイン学部開設にあたり、内部のみリフォームを施し2005年に竣工。吹き抜けのアトリウムが特徴的で、最新の3Dプリンターやレーザーカッター、各種工作機器が充実し、技術や機械操作に精通した常駐技術員が相談や指導を行うなど、人間環境デザイン学科の演習の場として常に学生の創作活動を支えました。



豊富なメニューでキャンパスライフを応援
「朝霞生協食堂」

豊富なメニューが自慢の朝霞生協食堂は「カフェテリア」「麺コーナー」「丼コーナー」のほか、サラダバーなど充実した品揃えで、楽しい食事のひとつを提供しました。一人暮らしをする学生へのサポートとして、食堂のレシートには選んだメニューの栄養バランス点数を表示。簡単に栄養価のチェックができる仕組みが好評でした。



福祉・健康・人を象徴する緑あふれる
「憩いの広場」

四季折々の風景が楽しめる憩いの広場では、天気の良い日に学生たちがスポーツを楽しんだり、ベンチで談笑しながら食事をしたりするなど、学生生活の楽しい時間を過ごしました。また、朝華祭では、メインステージが設置されるなどさまざまな表情があり、多くの学生にとって思い出の場所となりました。

NEXT TOPICS

ライフデザイン学部長 スペシャルインタビュー

次のページでは、ライフデザイン学部の水村容子学部長に、朝霞キャンパスでの取り組みや成果などを振り返るとともに、赤羽台キャンパスへの移転で目指すものについてお話をいただきました。 →P.06

赤羽台キャンパスに 新校舎「WELLB HUB-2」が誕生

建築家・隈研吾氏が建築設計を行ったライフデザイン学部等の移転先となる新校舎が2021年4月に赤羽台キャンパスに誕生します。「つながる」をテーマにデザインされた空間や学びの設備を、2021年3月発行予定の261号で特集します。



パース図提供：東洋大学赤羽台キャンパス設計監理共同企業体（隈研吾建築都市設計事務所・日本設計・戸田建設）

朝霞キャンパスの軌跡 Interview

“人々の生活に密着し、地域と連携する学び。
それはつまり、「地域と一緒に成長する学部」。
キャンパス移転は新たな飛躍への好機です。”

ライフデザイン学部 学部長

水村 容子

Profile

ライフデザイン学部 学部長。人間環境デザイン学科教授。博士（学術）。建築計画学・住居学を軸足に、特に高齢者や障がいのある人が暮らす住宅を研究。この分野のモデルともいえるスウェーデンでの研究を経験（スウェーデン政府給費生）。本学教授着任後も海外特別研究時に、スウェーデンで研究生活を送る。著書『スウェーデン「住み続ける」社会のデザイン』（2014年）など。



朝霞キャンパスで育った ライフデザイン学部 「誰かのためのプロフェッショナル （専門家）」の養成

朝霞キャンパスにライフデザイン学部が設置されたのは、2005年。日本で初めて「ライフデザイン」という名称を冠した学部でした。現在は「生活支援学科生活支援学専攻」、「生活支援学科子ども支援学専攻」、「健康スポーツ学科」、「人間環境デザイン学科」の3学科・2専攻で構成されています。いずれも、高齢者支援や子育て支援、社会福祉サービス、健康増進、さらには環境デザインという、人々の生活に密着し貢献する実学です。それぞれの学科の専門は従来の学問分類では別々のものですが、これをひとつの学部の中に置くことで学際的な学びの実現を目指しています。学部共通のプログラムとして他学科の分野を学べる仕組みもあり、「この街にはこんな福祉サービスが重要だ」、「スポーツを通じてどのように健康を維持するか」、

「人を中心に考えたものづくりや環境づくりとは」など、自分の専門を超えて、大切なことを感じ取れる学際的環境が整っています。

すべての学科に共通しているのは、「誰かの幸福のため」の学びであることです。生活や健康、環境や子育て、高齢化など、すぐくあたり前の、日常に関わる分野を扱っているのも、より直接的に人々と関わられます。それだけに、個々人のもつ教養や何が人を幸せにするのかなどの哲学が重要だと考えます。

また、学際的・分野横断的に学び、「他の領域の人と話し合える共通言語をもったプロフェッショナル（専門家）」を育成している点も特色です。例えば建築の専門だけれど福祉や健康のことも分かっていたり、あるいは運動の専門家だけれども環境の重要性について詳しいなど。自分の専門を極めつつ、他領域の人とコミュニケーションがとれる人材が育ちます。

現代では、専門領域を深く追求していく力も必要な一方、広い視野で横断

的にコラボしたり、身近な課題解決を実践できる能力も非常に重要です。生活者と専門家、両方の視点を持ち、繋げられる人、それが本学部で学んでいる学生たちの将来像です。

朝霞キャンパスでの15年間で 確立したのは発展の基礎、 そして社会的な存在意義

前述のような学びを確立し、その成長の原動力となったのが、朝霞キャンパスを取り巻く周辺の地域であり、そこに住まい、働き、学ぶ人々です。



私たちの学びの領域はどれも人の生活に沿ったもので、キャンパス内の閉ざされた環境だけで学べるものではありません。また、社会にどんなアウトプットができるかということが常に教育プログラムに取り込まれていますので、必然的に教育が地域との連携・貢献に繋がっていきます。

朝霞市は地域の特性として、東京郊外のベッドタウンでもあり若年層や子育て世代が比較的多いエリアです。そんな地域と繋がる学び・学外での学びの数々が学部の発展を支えてきました。例えば「子育て支援プログラム（子育てサブリ・子育てひろば・キャンパス活動）」などで子どもや保護者を支援したり、教員や学生が講習会を開いたり、プレイパークでの指導やイベント開催にあたったり。学科ごとにたくさんの地域連携・地域貢献プロジェクトを立ち上げ、発展してきました。

こうした積み重ねの結果、行政や地域のNPO、地域住民の方々との関わりが強まり、活動が広がることである

種のコミュニティをも形成しています。地域の取り組みと、学部の取り組みが手を取り合い「ともに育つ」ことができたといえるでしょう。

ライフデザイン学という、人の生活を考え・教育し・研究し・実践していく、そして地域のハブ（連携の中心）となる。そんな、ライフデザイン学部の社会的な存在意義をあらためて明確にしたのが、朝霞キャンパスでの年月だといえます。

赤羽台キャンパスへの 移転を機に、さらなる飛躍へ

新キャンパスのある北区は東京23区の中で最も高齢化率が高いエリアです。ただ、かつての工場跡地の大規模開発もあり、今後は若年人口も増えていくと期待されています。つまり、高齢者をいかに支えるかという課題と、次世代をどう育成するかという、日本全体が抱えている課題の縮図がここにあるわけです。

他にも学びに関わる要素がたくさんあります。北区には国立スポーツ科学



センターがありトップアスリートの活動拠点になっていること。キャンパスに隣接する団地は、戦後最初に中心市街地に建設された日本有数の集合住宅団地であり、住人の高齢化や建物の建て替え、住民コミュニティの維持などの課題も抱えています。東洋大学は北区ともUR都市機構とも包括的な連携協定を結んでいます。つまりここは新しい学びにあふれたフィールドです。このキャンパス移転を機に、学生も教員も課題解決の実力をさらに磨き、日本を明るい方向に変えていく牽引力になることを目指していきます。